

赤木智子の生活道具店

あかぎ・ともこ
赤木智子さん

写真／雨宮秀也

能登暮らしから感じる、
ほんとうに好きなものや、
美しい生活の道具。

夫である、輪島の塗師・赤木明登さんとともに、石川県の輪島に移り住んで20年。それ以前は東京のギャラリーでたくさんさんのモノと向かい合い、まだ見ぬ作品を貪欲に探し、「突っ走る生活」だった赤木智子さん。生活が変わって20年が経ち、近頃はモノとの出会いについてこう考えている。

「東京のように情報にたくさん囲まれていると、ものの良し悪しを作家の名前、値段、評判など頭で考えていて、かえって難しいと思います。私も当時は頭がいつぱいでしたから。若いうちに能登に移り住んだのはかえってラッキー。都会育ちの私では感じられない

と思っていた。信頼できる感覚を、少し、取り戻せた。以前よりも深く、深く、ものを見ています」

輪島の住まいは山の中。畑で野菜を植え、地元の漁師から丸ごとの魚を買う。都会暮らしから一変、ものがあふれているわけではない環境なのに、赤木家でふだん使う生活道具が訪れた客の目に留まって、一連の企画展『赤木智子の生活道具店』が始まったのだ。

「いつでもそこにあつてすぐ手に取れるわけではないので、求めるものに敏感になりました」

情報は少なくなつたけれども、感覚はいつそう研ぎすまされた。

「でも自分が一個人、スッピンになつたときに、おもしろいもの、色、形、言葉、着るもの、ほんとうに好きなものを選んで展示するのは難しいですね」

智子さんの「好きなもの」とはどんなものという問いに、「媚びてないもの」とは、一番最初に出てきた答え。

「デザインが凝っていたり、かわいらしいのもダメ。伝統工芸に寄り過ぎているものもいや。バランスが重要だと思います。ほうきについてはフェチのように好き！ 実際に使ってみて、自分の小さな、小さな遺伝子のなかから出てくる、本能を呼びさまされるもの、うーん難しい……」

感覚を言葉で著すのは至難の業。はずむように楽しげな文と智子さんの「好き」を本書で感じてください。



赤木智子の生活道具店
新潮社 1,575円

撮影・西村博之



1962年、東京生まれ。現代陶芸をおもに扱う「ギャラリー玄海」勤務後、赤木明登さんと結婚。'89年に奥能登に移り住む。次回「赤木智子の生活道具店」は、2011年3月26日から愛媛県西条市『陶倶楽部』にて。www.nurimono.net